ベストクラス候補選定理由書

作成者：伊藤博之・野本立人・大野沙絵子・國光祐貴・末松愛香・中村友繁・新島泰誠・東森陸士

科目名称　　情報処理基礎演習（①クラス） （担当教員名：小川修史・鈴木正敏）	
課　　程　：　学部	開講時期　：　前期
授業形態　：　演習	授業規模　：　３１人～８０人
インタビュー対象教員名　　小川修史 （実施日時：９月４日；　実施場所：Zoom 上）	
インタビュー対象受講者名　矢倉桜子、川内愛心、福井康太 （実施日時：９月４日；　実施場所：Zoom 上）	

選定理由

評価点が高く、「先生のお話が面白い」、「月曜１限にも関わらず、授業に行くのが楽しみ」などのコメントや、雰囲気の良さが伝わるコメントがきわめて多かった。このような高評価の授業の魅力や秘密に迫りたいと考え、インタビューを実施した。

《教員インタビューより》

目標設定：１年生を対象に、コンピュータの基本的操作やソフトウェアの使い方（文章作成など最低限の資料作成や関数の利用、プレゼン作成などの処理能力）を身につけさせることを目標としている。

内容：コンピュータの基本操作の習得に加え、基本操作の必要性について認識させることを意識している。AI を用いて操作を自ら習得することが可能な時代であるからこそ、継続性を意識した内容を含めている。

評価：課題は基本操作の確認に加え、主体性を促す内容（難易度の高い課題、オリジナル調査のプレゼン）が含まれている。

方法：学生の顔を覚えるのが苦手なので、顔付きの名刺を最初の授業で学生に作らせ、授業前にその名刺を取ってもらい出欠をつけている。単語帳のようにして通勤時に覚えるようにしている。

月曜１限対面での楽しい授業の工夫として、最初 10 分雑談から始める。なるべく学生と面白く楽しい話をする。（パリコレの話など）。教師の仕事は、指示に従わせることではなく、生徒の頭を（楽しく）動かすこと。「スマホ見てもいいよ。楽をしてもいいよ。逃げてもいいよ。」と言っている。面白くないのは教員の責任（もある）。

授業構成の工夫として、課題だけ出して「放置」（学生の様子を細やかに見取りながら、適切なフィードバックなどを考えながら）する。学生が煮詰まってきたと思った瞬間に、少し活性化させる働きかけをする。「面白い」ものを作らせる。「教えすぎない」姿勢を大切にしている。（教えすぎると、学ばない）

ユニバーサルデザインやインクルーシブな場を意識。トイレは断りなく行ってもよし。安心感を持たせる。欠席の際は、どんな内容でも良い（嘘も可能）ので必ず連絡させる（不登校対策もある）。遅刻しても怒らない。「よう来たな！」。一斉授業ではなく、個別最適化でもなく、目の前の一人ひとりが大切。それが数十人集まっていると考えるべき。大人数の授業であっても、一人ひとりを大切にし、全員にとって面白い授業を意識する。

《受講者インタビューより》

月曜１限だけど、10 分の雑談を聴きたいから間に合うように行っていた。面白い雑談の後、難しい課題が与えられる。教師からは直接教えられず、グループやペアで教え合い、自分たちで進めていくのが楽しかった。自分が相手に教えることでどちらも学びを得られた。とりあえず最後まで自分でやってみようと思えた。学習者が余裕を持つことのできる、安心できる環境づくりの大切さを学んだ。学生側の自由が効く、厳格ではないからこそ「ちゃんとしよう」と思えた。一人ひとりに応じた声掛け、寄り添う指導が徹底されていた。教師の卵として教師の心構えとして、授業を行ううえで、学習者一人ひとりをきちんと見ておくことの大切さを学ぶことができた。

以上より、「楽しく面白い授業」を実現するために、至るところに教員の細やかな仕掛けと配慮があり、インクルーシブな場づくりを強く意識し、受講者が安心できる環境を提供することで、主体的、協働的に楽しく学べる授業づくりの土台が構築され、「人を育てる」ポリシーが受講者側にも伝わり、自分たちで楽しく学びあう授業が創り上げられていることが明らかになった。まさにベストティーチャー以上にベストクラスと呼ぶにふさわしい授業であると考えたため、本授業を「ベストクラス」として選定する。